

令和7年1月

◆八木健 選 ～鈴木和枝・句集『離農』を読む～

鈴木さんは、静岡県島田市在住。俳句結社「主流」（主宰・田中陽）の会員である。主流の作品は、季語や定型に束縛されない吟ぎに近い一行詩と言うべきか。“これこそが俳句の主流なり、”という田中陽氏の自負が結社名となっている。鈴木さんはその主流で、昭和四十二年から会員として感性豊かな作品をつくり続けて来られた。『離農』は、第三句集である。

「あとがき」に、農家に嫁ぎ農業は成り行きでやっていたが句材に事欠かないことに気づいたと書いてある。結果的に、俳句が本業となり農業は副業となってしまうようだ。鈴木さんは、八木健の生家の隣町の俳人。縁あって平成十九年に、滑稽俳句協会に入会された。

句集のタイトルが「離農」になった句は、

◆この春離農うすうす気付いている地下足袋

真っ先に離農の決意を告げねばならぬ地下足袋はすでに気付いていたのだ。地下足袋を擬人化し、地下足袋に人格を与えて、対等な付き合いをしている。この句集には擬人化の句が多いが、擬人化は滑稽俳句の特徴でもある。

◆土筆の丈にしゃがみ込む同じだね

土筆がふふふと答えたかもね。

◆郵便受けバイクの音聞き分けている

この句は、作者が郵便受けになりきっている。擬人化は、「対象」を人間扱いするのではなく、作者が「対象」になってこそである。

◆葱坊主のガッツポーズにはかなわない

この句では葱坊主と対等どころか敬意をはらっている。同じ葱坊主の句でも、こちらは、

◆葱坊主てんでに宇宙狙っている

葱坊主を凝視して、それぞれの個性に気づいたのであろう。深い読み込みだ。

◆好きなだけ泳げおたまじゃくしの内に

おたまじゃくしに話しかける作者の優しさに誰もが感動するだろう。心の根っこに「優しい」が溢れている。

◆ドクダミ引っこ抜く淋しさ抱えていた

引っこ抜かれるどくだみの淋しさを見逃さない作者の目線がいい。『離農』を読んで感じたのは作者の立ち位置が明確なことである。

◆農婦ふと立止まったスーパーの安値大根

農婦とは作者である。こんな安値で農家の手取りは一本百円にもなるまいという怒りがある。それは、作者が土に生きてきた姿勢であり、立ち位置である。

◆農道が真っすぐすぎて日本が危ない

時事俳句である。真っ直ぐな農道に、合理性のみを追求する在り方に、「失われる日本の心」を危惧している。

句集の後半には世界に視野をひろげて、ウクライナの戦いを憂慮する句が並ぶ。

◆地球儀が熱っぽいここ二年

◆戦地を逃れて来た雲くっついては離れ

◆巨大な冬瓜戦車だけにはなるな

◆親の又親の代から銃を持たない蟻の列

◆秋が足踏みしているロシア国境

どの句にも鈴木和枝の直感が息づいている。

◆一〇〇円バス待ついい顔ばかり

作者も一緒にバスを待つ、いい顔の一人である。

◆拝んでから再び手袋の中で祈る

生き方が見える作品である。手袋の中で祈っているのが神様にはちゃんと見えているだろうね。

◆大根いっぱい干してあるこの家が好き

もう何十年も、毎年必ず大根をいっぱい干している。たくあんを沢山漬けてバリバリ噛んで健康的に笑う家だろう。

◆ただ生きてるだけじゃもったいない夕焼け

強烈な夕焼けの色にパワーをもらって血が滾る。

◆南瓜半分に切る終戦直後と同じ

南瓜を均分に切った瞬間、終戦直後にタイムスリップ。脳裏にあの頃のさまざまが浮かんだのだ。

◆ぺこぺこしても本音見せませんネコジャラシ

作者はネコジャラシとは違って『離農』に本音を書いている。忖度なしの本音である。

この第三句集は、鈴木さんが八十歳を目前にしてまとめられたものだが、随所に率直を書いている。以下は正直の句。

◆肩書きなんてない蒲公英と同じさ

◆背伸びしたら蕨じゃなくなるよ

◆過去をいっぱい噛んだ歯を診てもらおう

◆本音を吐きながら桜散る

◆つい押んでしまうまあるい月

◆女郎蜘蛛と目が会う互いに子を持つ親

◆曲がってしまった指切りの指又会おう

鈴木和枝：昭和十九年生まれ。現代俳句協会会員、島田市文化協会役員。句集『おかしな苦勞』『蛙の主張』。口語俳句協会賞、口語俳句作品大賞奨励賞など多数受賞。